

探究・研究支援プロトコル

生徒の自立を促しつつ、指導者が疲弊しない「全員参加のリーダーシップ」を実現するための指針です。日々の教室巡回や面談時の「判断のコンパス」として活用してください。

1. 探究支援の4つの役割(フレームワーク)

支援を「性格」ではなく「機能」で捉えます。状況に応じて以下の4つの役割を使い分けます。

タイプ	名称	介入スタイル	具体例・ねらい
A	「型」を授ける梯子	直接・成果	予算申請や論文構成などの「作法」を教える。まずは基本の形をつくる。
B	「思考」を導く梯子	直接・過程	「なぜ？」と問い、論理の飛躍を指摘する。正しい思考のプロセス(考え方の作法)をつくる。
C	「気づき」を待つ見守り	間接・過程	生徒の言葉を反芻し、生徒自身で矛盾や新たな問いに気づくことを待つ。意欲を支え自走を促す。
D	「環境」をつくる見守り	間接・成果	専門家や資源を提示し、生徒が自ら選ぶことを支える。指導者が「透明」になる最終的な状況。

※探究初期はA・Bの梯子かけが多め、後期はC・Dの見守りへの移行を目指す。また、タイプC(気づきを待つ)において、言葉での対話や言語化することが得意ではない生徒に対しては、本人のペースでじっくり待つことや図解、付箋、デジタルツールといった各種ツールの活用など、多様な表現方法を認める。

2. 探究サポート・3ステップ・プロトコル

教室で生徒と接する際の思考手順です。

ステップ1: 動態判定(止まっているか、動いているか)

- 止まっている(迷走・停滞) → 「梯子掛け」(直接介入:タイプA・B)
- 動いている(試行・没頭) → 「見守り」(間接支援:タイプC・D)

ステップ2: 処方判定(何が足りないのか)

- やり方・枠組みが不明(不作法) → タイプA: 型を与える
- 考え方・論理が未熟(低迷) → タイプB: 思考の補助線を引く
- 問いを深める余地あり → タイプC: 内省を促す問いかけ
- 資源があれば加速する → タイプD: 情報や人を紹介する

ステップ3: 配役判定(誰がやるのが適任か)

- 自分(指導者)のキャラクターや専門性、関係性に合っているか？
- AI(**NotebookLM**等)に型の整理や壁打ちを任せられないか？
- 他班の生徒(ピア)や他のチューターにバトンタッチできないか？

3. 基盤となる考え方

全員参加のリーダーシップ	教員一人が背負わず、状況に応じて誰もが助けはしごをかける。
ともに学びを創る力	生徒と教員が「教える・教わる」の関係を超え、研究のパートナーとして共創する。
梯子掛けから見守りへ	最初は手厚く、次第に手を放す。最終的に指導者が不要になることが理想的な姿。

(本プロトコルはGoogle GeminiとChatGPTを使用して作成しました)